

枕草子「香炉峯の雪」章段の受容と絵画・音楽

浜口俊裕

はじめに

本稿は二〇二三年三月三日、大東文化大学大学院文学研究科日本文学専攻主催大学院特別講義において、『枕草子』「香炉峯の雪」章段を受容した中世から昭和時代前期までの諸作品について、右の標題で講じたものである。「香炉峯の雪」章段に因む絵画についてはすでに拙稿^①があり、また「香炉峯の雪」章段以外に取材した『枕草子』の絵画についても拙稿^②がある。併せて参照願えれば幸いである。尚、掲載する図版は架蔵によった。

『枕草子』「香炉峯の雪」章段の概要

『枕草子』「香炉峯の雪」章段は、三卷本系統、伝能因本系統、前田家本の諸本間に内容に係わる頗る重大な本文異同は

ない。そこで江戸初期延宝二年^{一六七四}の『枕草子春曙抄』により、本文を掲げると次の如くである。

雪いと高く降りたるを。例ならず御格子まゐらせて。炭櫃に火おこして物語などして集り侍ふに。「少納言よ香炉峯の雪ハいかならん」と仰られければ。御格子上げさせて。御簾高く巻き上げたれば。笑はせ給ふ。人も皆「さる事ハ知り哥などにさへうたへど思ひこそよらさりつれ。猶此宮の人にハさるべきなめり」といふ。

御格子は辰一刻（午前七時）に上げ、戌一刻（午後七時）に下ろしたが（『侍中群要』第一・上格子事）、起筆の「雪いと高く降りたるを」に徴するに、大雪で寒気が厳しかった故に、「例ならず御格子」を上げずに、炭櫃に女房らが集まって談話に興じていたと解される。御格子を閉ざして大雪の日の風情に興関心な女房らの有り様に、中宮定子は非日常的な大雪の日こそその風情を楽しみなさいとの心緒であったと思量される。

中宮は清少納言を指名し、『白氏文集』巻十六「香爐峯下、新下山居、草堂初成。偶題東壁、其三」九七八の律詩第四句「香爐峯雪撥^レ簾看^ル」を活用して婉曲に撥簾を誘導し、大雪の日の女房らの在り方を穏和に教導したというのが事の顛末であろう。この章段を清少納言の手柄話・自讃談と説く諸注も少なくないが、主役は御簾を上げさせた中宮であり、清少納言は中宮の意向の的確な情勢判断者であった。常々風雅を重んじる中宮の気風に共感する清少納言が、定子後宮の広報官として、自らの手柄話の披露ではなく、折々に女房らの高みを教導する才媛にして慈愛に満ちた中宮定子の威徳賛美譚としてデザインした章段と捉えたい。

『十訓抄』『悦目抄』での受容

『枕草子』「香炉峯の雪」章段話をいち早く受容したのは建長四年^{三五}の『十訓抄』である。その序文によると年少者に勸善誠悪の思慮分別を啓蒙する目的で編んだ説話集で、その第一「人に恵を施すべき事」二十話に、

同院（浜口注―一条院）雪いと面白く降^ふりたりける朝端近^{あしはしちか}く出居させ給て雪御覧しけるに香爐峯^{かうろほう}のありさまいかならんと仰られければ清少納言御前に候けるが申事ハなくてみすををしあげたりける世の末まで優なる例に云傳られける彼香炉峯の事ハ白樂天老の後此山のふもとに

一の草堂をしめて住みける時の詩に

遺愛寺^{イアエジノ}鐘^{カネ}ハハタ、枕^{マクラ}聴ク香爐峯^カ雪^カ撥^{ケテ}レ簾^{ラシ}看^{ミル}

とあるを帝仰出されけるによりて御簾をバあげづるなり（後略）

とある。源泉の『枕草子』「香炉峯の雪」章段は、中宮が「少納言よ香炉峯の雪ハいかならん」と問い、その真意を清少納言が的確に把握して機転を利かせた対応ができた故に、中宮を喜悅させた。この知的で教訓的な清談が、『十訓抄』の徳目「人に恵を施すべき事」に適する例話として撰取されたと考量される。

しかし、話の展開には『枕草子』との大きな相異もある。『十訓抄』では記事に中宮が登場することはない。一条帝を「一条院」と追号で記し、一条院が降雪した冬の朝に雪見をし、その御前に伺候した清少納言と『白氏文集』を介した智的な問答に、清少納言が口頭で応答しなかったことの説明句「申事ハなくて」を挿入して、撥簾した機智的行動の秀逸さが幼年の読者に判る文脈に変容して編成している。ここで清少納言は、中宮の女房ではなく、一条院付き内裏女房の位置づけである。この変改は、才媛賢女の清少納言を読者に中宮の女房で喧伝するよりも、帝の女房に見立てて帝の叡感に与つたと説くことが、処世訓書を志向する『十訓抄』の大義名分に好適で説得的であるとの見通しで、史実からの逸脱になったのだろう。なお、歌論書『悦目抄』も『十訓抄』と

頗る近似の記事を撰取するが、詳細は拙稿を参照されたい。

『女郎花物語』での受容

万治四年^{一六六一}一月刊の仮名草子、北村季吟撰『女郎花物語』下冊が近世における受容の先駆である。「香炉峯の雪」話最初の絵入り製版本で、下冊跋文に「をミなへしといふ草紙は源氏さごろもなどやうに。名たかき物とハきこえねど。ふるき女のうた・さならぬことの葉をもかきつらねつ・・ひとへに我どちのめのわらハに。いましめをたれきこえつる」とあり、賢女の古歌や逸話を載せて婦女童幼に女性の徳を啓蒙する女訓書として編成された。その「香炉峯の雪」話は次の如くで、挿絵が図1である。

おなし清少納言。一条院の御まへにさふらひけるに。雪のおもしろくふりたるを御らんじて香爐峯もいかゞあらんなどミかどのの給はせけれバ。清少納言やがて御まへのミすをまきあげ侍けるに。いミじく感ぜさせ給ひしとかや。これは白楽天の詩に。遺愛寺の鐘ハ枕をそバだてゝ聞。かうろほうの雪ハすだれをかゝげてミるとある心にて。ミすをまきあげ侍り。(後略)

記事は『十訓抄』を換骨奪胎し些か簡潔に再構成して「一条院」の叡感を強調し、撥簾した清少納言の機智的行動を賞嘆した趣向。『十訓抄』と同じく一条院の問いは、雪見後の

ことだから雪景を見たくて発問したのではない。撰者季吟は博覧で前掲『枕草子春曙抄』の著者でもあり、清少納言が院の女房でないことは熟知していたはずである。季吟が『枕草子』に抛らず教訓的に潤色された『十訓抄』に与して清少納言を院の女房に見立てたのは、前記の跋文に言う如く、『女郎花物語』の撰集が江戸期の婦女童幼に女性の徳や教養の教化を図る女訓書であったからだろう。

また清少納言の対応に状態の副詞「やがて」を挿入し、応答の慧敏さを際立たせたのは『女郎花物語』が嚆矢で注視される。『女郎花物語』以降、副詞「やがて」「つと」「直ちに」などの言い回しが継承され、後世に俊敏な清少納言像が定着する淵源として至大な影響を与えた書物である。これ以降、副詞「やがて」などを挿入した作品に、次の如きものがある。

「やがて」……『女郎花物語』^{一六六八年} 『本朝女鑑』^{同上} 『和哥奇妙談』^{一六九九年}

「即・即ち」……『大日本史』^{一七二六年} 列伝 『前賢故実』^{一八六八年}

「つと」……『女文寶智惠鑑』^{一七九一年} 『女用文章千代壽』^{一八三三年} 『婦寶文庫』^{一八二八年} 『女教萬方全書東鑑』^{一八三三年}

「ただちに・直ちに」……『百人一首一夕話』^{一八三三年} 『歴史繪しらべ』^{一八八九年} 『大日本史略圖繪』^{一八九九年} 『高等國語讀本女子用下篇卷一』^{一九〇〇年} 『尋常小學讀本卷十』^{一九〇〇年} 『大毎小学生新聞』七月三日付^{一九三八年}

挿絵図1は、絵師が不詳だが、王朝絵巻の伝統的な吹抜屋台の構図に上下遠近法を駆使して独創的である。室内の遠景に、縷網縁の玉座に冬の直衣、切袴で

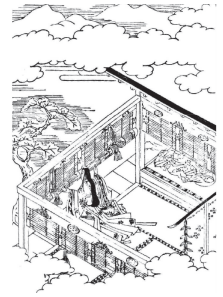


図1

座る一条院、近景に清少納言を描く。近景には主役を配置するのが普通で、図1は清少納言を主役と見做したようである。一条院が玉座に座る構図では、清少納言が院正面の御簾を上げるのが通例だが、図1の院の正面南廂の御簾はすでに上がり、西廂の御簾を上げる図様は頗る稀少である。西面に記事にない雪持ちの松を意匠する。松図は針葉を精細に描くのが一般的で、図1にそれが見られないのは、葉が隠れるほどの大雪を表象した画意と察せられ、挿絵での創意工夫の秀逸さが窺われる。

『本朝女鑑』での受容

寛文元年^{一六六一}九月板行の浅井了意の仮名草子『本朝女鑑』巻九弁通上、清少納言九に、

またふゆの比清少納言一条のみの御まへにさふらひけるに。ゆきのおもしろくふりたるを御らんじて。かうろほうもいかにあらんなど。みかどのたまハせければ。せ

いせうなごんやかて。御まへのミスをまきあげ侍べりけるに。いみじく。かんぜさせ給ひしとかや。これハはくらくてんのしに。ゐあいじのかねハ。まくらをそバダて、き、かうろほうのゆきハ。すだれをか、けてミると。いふ心にてミスをまきあげ侍べりとかや。

とある。『十訓抄』の流れを汲む『女郎花物語』の翻案で、撥簾した清少納言の機知的行動に「一条院」が叡感した話として編む。巻名「弁通」は弁才がある意だが、詞を駆使せず動作で応答を体現して見せた「香炉峯の雪」話の博学賢女な清少納言を、女性の鑑として女訓書での例話に受容したのであろう。

絵師不明の図2は『東洋女訓叢書』収載の挿絵¹⁰。同書は寛文元年板本文に適宜漢字やルビを当てている。挿絵に記事にない雪持ちの松と小竹の配置に若干の変更が見られる



図2

ほかは、寛文元年板の構図に酷似する。本来、簀子側に御格子が在るので撥簾は廂の間で行われる。これを清少納言が簀子で行うのは実相に反する。また上の御格子を取り外した図様も実際的でなく、挿絵に厳密さを欠くところがある。

『和哥哥妙談』での受容

作者不明の元禄十二年^{一六九二}刊『和哥哥妙談』「清少納言が事」にも次の如くある。

又冬の比一条院御前に召れてさふらひけるに雪の面白く降たるを御らんじてかうろほうもいかがあらんとのためハせけれハせいせうなごんやがて御前のみすをまきあげ侍りけるにいみじくかんぜさせ給ひしとかやこれは白らくてんが詩に。ゐあいじの。かねはまくらを。そバだてて。きゝ。かうろほうのゆきハ。すだれをかゝげてミるといふ心にてミすをまきあげ侍しとかやまことにいみじき才なりけり。

記事は『本朝女鑑』とほぼ同文で、それを按配して成ったと見られる。「一条院」が雪見後に香炉峯のことを問う展開は、『十訓抄』『女郎花物語』『本朝女鑑』と同じで、素早く撥簾した清少納言の行動を「いみじき才」と評した教訓譚。挿絵図3には、纏緇縁に着座する帝、撥簾する清少納言、記事にない雪持ちの松を意匠する。『本朝女鑑』と同様、上の御格子まで取り外し、簀子で撥簾するのは実相と乖離し、絵師の有職に関する未熟さが窺われる。



図3

『繪本故事談』での受容

正徳四年^{一七一四}六月刊行の山本序周編『繪本故事談』巻之八、清少納言条には、次の如く受容された。

清女^{清少}納言也。天資俊爽才名にして衆に秀たり。一條帝の御時皇^後宮に宮仕す。帝嘗て紫閣に臨御ある時に偶朝雪大に積れり。帝群卿を顧給ひて香爐峯のハ如何との給ふ。諸卿皆答ることあたはず。清女傍に侍りて立て御簾を捲揚。帝大に感して是を悦給ふ。蓋白居易か香爐峯の雪ハ簾を撥て看といふ句を思ひて也。其才の敏速なること展^のことし。

大雪の朝に「一条帝」が紫閣に臨御して「香炉峯の雪」について問うと「諸卿」が返答に窮して、傍らの清少納言の撥簾に帝が喜悅した話として受容する。清少納言が「皇后宮」女房である点は『枕草子』に整合するが、帝が問い、清少納言の才知に歎感するのは『十訓抄』に同工で、問いに諸卿が返答できない点は『繪本故事談』での新たな展開である。また清少納言の秀拔さを「其才の敏速なること」と評する点も『繪本故事談』の新たな識見である。その挿絵が図4で、絵師は狩野派の町絵師橘有税(守国)。「女郎花物語」「和哥哥妙談」の挿絵と同じく龍顔の露見を避けて纏緇縁から帝の臨御を連想させる常套の描法だが、衣冠束帯姿の群卿を前にして撥簾する清少納言の挿絵は『繪本故事談』が嚆矢である。

南庭の左近に桜、右近に長寿を象徴する雪持ちの橘を配置した図様は、「紫閣」を紫宸殿に比定し、南階十八級（『大内裏図考証』紫宸殿）を五級で簡略にしたようである。

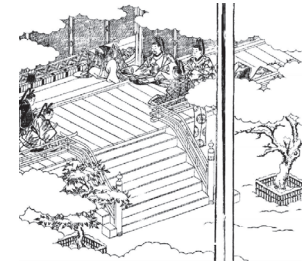


図4

『繪本故事談』は「和漢の故事を児童向きに説き、絵を豊富に入れたもの」⁽¹⁶⁾で、正徳四年の開板以来、約百年間に亘って人気を博した絵本であった。天明三年⁽¹⁷⁾刊の江村北海『授業編』巻之一「幼学」条には、幼児期に与えたい絵本の筆頭に『繪本故事談』を挙げる。この間、父母の絵解きで多くの幼児が才女清少納言の名を耳にしたことであろう。

絵入り『十訓抄』での受容

享保六年⁽¹⁸⁾に絵入り『十訓抄』が板行された。記事の内容は前章『十訓抄』に述べた如くである。絵師未詳の挿絵図5は、記事にない松の雪の様相から大雪の日の事柄であることが窺知される。上の御格子まで外した図様は、『本朝女鑑』『和哥奇妙談』と同じく実相に反する。

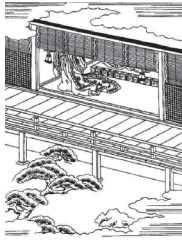


図5

『四季川鏡』女文寶知惠鑑』での受容

寛政三年⁽¹⁹⁾九月刊の『四季川鏡』女文寶知惠鑑』には、挿絵図6の雲形に次の如くある。

清少納言 清女ハ肥後守元輔ガ女也。ある年の冬雪のいとふ降けるに帝紫閣に出御ありて香炉峯の雪ハいかにと群卿に仰けれバあへて答る人もなかりしに清少納言かたはらに侍りしがつと立て御簾を巻揚しかハ帝はなハだ観感ありけるとなりこれは唐の白楽天ガ詩に香炉峯の雪は簾を撥て看ると有るを思ひ出して御簾を巻たるなり其博学頓知なる事見る人かんじけるとなり⁽²⁰⁾

「帝」の勅問に「群卿」が答えられず、傍らの清少納言がさっと立って撥簾したことに帝が観感した話で、『繪本故事談』の翻案と見られる。清少納言の撥簾を「博学頓知なる事」とする評は『四季川鏡』女文寶知惠鑑』の新しい識見である。北尾政美の挿絵図6は、記事に言う群卿を描かず、新たに女房を加筆した嘴矢である。「女郎花物語」同様、西廂での撥簾図は稀少で、室内に纏綿縁の畳、清少納言と女房の顔貌や衣装、室外に雪持ちの松や小竹、流水などを同一画面に精細に可視化した秀逸の挿絵である。

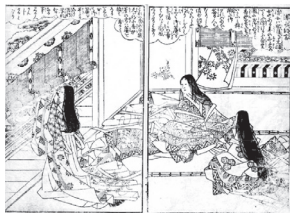


図6

『繪入書 女用文章千代壽』での受容

著者未詳の寛政五年^{一七九三}七月刊『繪入書 女用文章千代壽』には見返題目録に、「清少納言賢才図」とある図7に、次の記事がある。

清少納言ハ一條院の皇后につかえし女房なり 生賢才
 学世にこへけるある年の冬雪の降ける時帝紫閣に出
 御ありて 香炉峯の雪ハいかにと群卿に仰ければあへて
 答る人なし 清女つと立て御簾を巻揚しかバ帝叡感あり
 けると也これハ白楽天か香炉峯の雪ハ簾を撥て看といひ
 しによれり⁽⁶⁾

記事は『繪本故事談』の翻案だが、教養の高みを志す女子には清少納言の才学を知る啓蒙書になったであろう。挿絵は、「群卿」を省き、清少納言の対応を玉座の視点から描き、撥簾する清少納言の後背や、記事にない雪持ちの松、降り頻る雪を帝が眼にした光景なのであろう。

『婦賣文庫』『女用文章往かひ振』での受容

文政元年^{一八八}刊『婦賣文庫』及び天保四年^{一八三三}刊『女用文



図7

章往かひ振』での受容は、いずれも次の記事に挿絵図8が付随する。

清少納言ハ清原元輔の女にて上東門院につかへし女房
 なりき 或雪の日主上伺公の女に香爐峯ハいかにと
 詔 ありければ清女つと立て御前なる御簾をあげしとな
 ん これ唐土人の詩に香爐峯之雪 撥 簾見と作れるこ
 とを思ひもてきたる当意即妙なり 帝はなハだ叡感あり
 しとぞ⁽⁷⁾

帝が「伺公の人」に問う展開は『十訓抄』の流れを汲む。清少納言を「上東門院」藤原彰子の女房とするのは史実に反するが、清少納言の才知を「当意即妙」と説く評は、今日でも通行している。図8は見返題標題に「清少納言の奇才」とある。『繪本故事談』と同じく群卿を描く稀少画で、居並ぶ諸卿、撥簾する清少納言の後背、降り頻る雪などは、『繪入書 女用文章千代壽』と同様に帝の眼前に映った光景という趣向であらう。



図8

『理齋隨筆』での受容

文政六年^{一八三三}八月朔の序を有し、天保九年^{一八三八}春発行の儒者志賀理齋著『理齋隨筆』巻之六の四十二にも、『繪本故事

『談』を翻案して清少納言の才知の敏捷さを受容する記事と、浮世絵師柳川重信による画題「秀才貫三和漢」の挿絵図9がある。見開きの挿絵に松や小竹などを配して大雪の庭前を活写する。

扱又清女天資俊爽にして其身衆に秀たり一條帝の御時皇后宮に宮仕す帝嘗て紫閣に臨御ありしにたまたま朝雪大に積りたり帝群卿を顧給ひて香爐峯の雪ハいかにとのたまふに諸卿おのく答ることあたはず清女傍に侍りたりしが立て御簾を捲上げたれば帝大に感じ悦び給ふ是ハ白樂天が詩に香爐峯ノ雪ハ撥レ簾ヲ看といふ句あれバ也この時清女なほとし若かりし時なり其才の敏捷なることかくの如しとそ

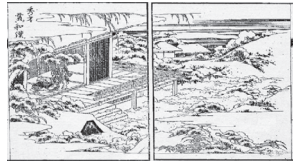


図9

やまと絵での広がり

清少納言の撥簾看図は江戸初期から昭和にかけて彩色のやまと絵のモチーフとしても広がりを見た。絵師土佐光起

が従五位下左近衛将監叙任の承応三年(一六五四)後に描いた「清少納言図」(東京国立博物館蔵)は著名だが、図10も落款に光起筆とある。このほか清少納言の撥簾を描く主な絵師を列挙すると、

- 勝川春草(一七二六? - 一七九二)・板谷桂舟(一七五九 - 一七九七)・田中訥言(一七八三 - 一八五九)・森西園(一七八三 - 一八五九)・森高雅(一七九〇 - 一八四四)・池田孤邨(一八〇三 - 一八六八)・冷泉為恭(一八二三 - 一八六四)・榊原文翠(一八二五 - 一九〇九)
 - 日比野白圭(一八二五 - 一九一四)・国井応文(一八三三 - 一八八七)・藤村琢堂(一八三三? - 一八六八)・平山東岳(一八三四 - 一八九九)・鈴木錦泉(一八六七 - 一九四五)・梶田半古(一八七〇 - 一九一七)・公文蘆淵(一七六六 - 一九四二)
 - 一八七〇 - 一九一七)・今村興宗(一八七三 - 一九二八)・上村松園(一八七五 - 一九四九)
 - 九・藤井澄湖(一八七九?)・斎藤弓弦(一八八二 - 一九四七)・岩佐古香(一八八四 - 一九五二)
 - 一八九二)・吉村忠夫(一八八八 - 一九五二)・林雲鳳(一八九九 - 一九八九)
 - 柴田春光(一九〇二 - 一九三五)・赤根悦堂(一九三三頃)・小宮錦石(生没年未詳)
- など多数にのぼる。

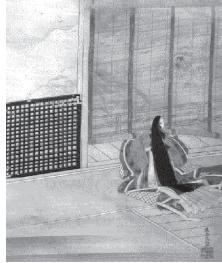


図10



図12



図11



図13

錦絵での受容

享保七年^{一七三二}十二月刊の松井立詠撰『^①繪文匣^{松玉舎}』に清少納言の撥簾を正面から描く簡素な木版墨刷絵が見られるが、その後の木版多色刷の隆盛により「香炉峯の雪」話は錦絵にも受容され広がりをみた。例えば文久三年^{一八六三}の「古今名婦傳 清少納言」は、三代歌川豊国（歌川国貞、俗称角田庄藏）の錦絵図14に、柳亭種彦の賛を認め、史実通り清少納言を皇后女房とし、その応答の秀逸さを『婦寶文庫』『女用文章往かひ振』と同様に「當意即妙」と評した。



図14

清少納言肥後守清原元輔の女にして一條天皇の皇后に宮仕し時の博士にも口開せぬ才女なり和歌を能賦文章尤自在の筆也或年の冬雪いと高く降たる朝皇后定子の宣ひけるハ少納言よ香炉峯の雪ハいかならんと仰られければ御答も申さでつと立て御格子上させ翠簾高く巻上たればうち點頭て莞尔給ひ其當意即妙を感じ給ひけりとなんこハ白楽天の詩に香爐峯雪撥簾看とある意也これ禪家の問答の如し才機満たる者ならでハなしがたきこと也此婦人の作枕冊子の一書當時の世態を尽して紫文の絶妙に亞たり崑山集に雪の花も今朝ハ句

ふや香炉峯 柳亭種彦記^②

また明治十八年^{一八八五}の楊州周延画「雪月花」シリーズ「山城 禁中の雪 清少納言」は、撥簾する清少納言や雪景色の庭に、「雪月花」に因んで『枕草子』本文にない紅梅の綻ぶ景に変容させた錦絵である。翌明治十九年の同じく周延画大判錦絵三枚続きの「禁中雪後和歌之圖」図15は、更に変容が甚だしい。室内に火桶、外の庭に雪を抱く五葉松、綻ぶ紅梅など『枕草子』本文にない景物を配置し、画中の帽額部分の色紙形に、



図15

一条帝の后上東門院ハ御堂関白道長公の御女なり才智勝る就中敷島の道好み給ふ一年冬雪後御歌の宴を催せらるゝの時偶く白居易が故事を思召て香爐峯の雪は如何にと曰ふ時に清原元輔のむすめ清少納言起て簾をまく后大に其才能をおんしやうせらるゝ也此故事ハ唐土白樂天老後廬山に草庵を結びし時之を作る其詩に曰く「遺愛寺鐘歇枕聽香爐雪撥簾看」と白氏長慶集にするせりと記す。この文中に中宮定子への言及がなく、藤原道長女上東門院彰子主催「雪後御歌の宴」での事柄に設定し、彰子の問いに撥簾した清少納言の才知を彰子が賞賛する趣向に変節して受容する。

明治期の歴史絵での受容

明治一八年^{一八八五}及び同三一年^{一八九六}刊の画帖『大日本史略圖繪』三十一「清少納言」には、画題を色紙形に「清少納言御簾を捲て白居易が詩に比し香爐峯の趣を説く」と記す安達吟光の極彩色木版画図16と、その裏面に南柯亭夢覚（高橋柯亭）の解説文が次の如くある。

少納言ハ肥後守清原元輔の女なり才學紫式部と名を齋くす嘗て一條帝の皇后に仕ゆ后ハ中關白道隆の女にして定子と稱す一年冬雪後左右を顧みて香爐峯の雪ハ如何と時に女官等未だ其意を解す能はず少納言座を起して進ミ直ちに簾を褰ぐ后意に偶白居易が詩一句を懷て命ず故に少納言の才華を感悦し愛愈々厚しと（此香爐峯の故事ハ唐白樂天老後廬山の麓に草堂を結び隱住せし時此詩を賦す其詩に曰く遺愛寺鐘歇枕聴香爐峯雪撥簾看と對句を作る此詩白居易長慶集に見ゆ）少納言の文才是を以て知る

（中略）南柯亭夢覺識²³

『枕草子』「香爐峯の雪」話の受容は、中世以降『十訓抄』の記事の翻案が主流だったが、明治半ばの『大日本史略圖繪』は、原典『枕草子』へ回帰する転換点になったと見てよさそうだ。但し挿絵



図16

の雪持ちの五葉松、高欄下の紅梅、池畔の枯葦、飛び立つ葦鴨などは『枕草子』の記事になく、吟光独自の景物である。明治二二年^{一八九九}刊『歴史繪志らべ』清少納言には、浮世絵師鍋田玉英画図17に『枕草子』に準拠した増田寛厚氏の詞書で「理齋隨筆」と同じく清少納言の才知の敏捷さを説く。挿絵の男官は『枕草子』本文になく歴史の図絵ながら整合性を欠く。



図17

少納言は清原元輔の女なり幼児より學問を好み博く和漢の書に明なり一條天皇の御世皇后に奉仕す皇后雪後左右を顧みられ香爐峯の雪相ふに如何と宣ひければ少納言直ちに起ちて簾を褰げたりと今皇后の宣ひしは詩に香爐峯の雪は簾を撥げて看ると云ふ句に因りしなり其敏捷なること斯の如し紫式部と共に才學世に高く枕の草紙を著して當時の風俗人情を寫す其文章優美にして世に稱せらる 増田寛厚書²⁶

明治二六年^{一九一三}には編集主幹石井研堂による児童向け総合雑誌『小國民』第五年十九号（明治26年10月、學齡館）口絵に、画題「中古之才媛」とある小林清親画の彩色石版画がある。廂の間で高く撥簾する立ち姿の清少納言、雪を抱く松樹などを描く口絵は、児童向け雑誌と言えども手抜きがなく編集者の教育的志向への高さが窺える。

明治期の国語読本での受容

明治三十三年^{一九〇〇}十二月発行の文部省検定済高等小学校国語科児童用『^等国語讀本^{女子用} 下篇卷一』「第六課紫式部と清少納言」にも、次の「香炉峯の雪」の逸話と挿絵図18が載る。高等小学校は、尋常小学校四年間を修了した後の中等教育機関で、十歳から入学し、修業年限が二年または四年であった。

清少納言は、(中略)皇后の御許に宮仕へし、(中略)或る年雪の降り積りける日、清少納言等、皇后の御前に侍りけるに、皇后は遺愛寺の鐘は枕をそばだててきき、香爐峰の雪は簾をかゝげてみるといふ唐詩を思し出でて「少納言よ。香爐峰の雪は如何に。」と仰せありければ、少納言は、直に立ちて、御前の御簾を巻き上げたり。皇后うち笑ませ給ひて、少納言の敏才を感じ給ひきとぞ。^(後略)

この教科書は同年八月の小学校令改正で新たに編集発刊された。右教材は『枕草子』にほぼ準拠するが、副詞「直ちに」は『枕草子』になく「女郎花物語」以降の言い回しを受容し、清少納言の才知を「敏才」と説く。『^等国語讀本^{女子用} 下篇』に「敏才^{ジビヤク} サバキキ」とあり、機転を利かす清少納言の敏速な

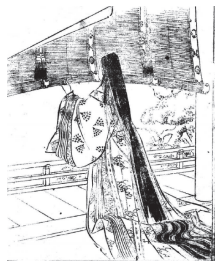


図18

知力を女子児童に教導するのが狙いだったようである。挿絵は撥簾によつて雪を抱く松など庭前の雪景色が皇后や女房の視界に入った景を表したのである。

明治四〇年^{一九〇七}三月に小学校令中改正があり、高等小学校の旧一、二年生を廃止し、尋常小学校に新五、六年生を設け、六年間の義務教育制になった。その新制度に移行した明治四三年^{一九一〇}六月発行の文部省検定済『尋常小學讀本 卷十』にも「第五課紫式部と清少納言」があり、次の「香炉峯の雪」話と挿絵図19を掲載する。

清少納言も亦紫式部と同じく宮中に仕へ、其の才氣を以て知られたりき。ある雪の朝、皇后は美しき御庭の雪景色をご覧じて、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。皇后の御感一入なりきとぞ。是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかゝげて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。萬づに心ききたること、此の一例にても知るべし。⁽²⁸⁾



図19

『枕草子』に準拠した第五学年用教材である。十年前の『^等国語讀本^{女子用} 下篇卷一』の教材の「雪の降り積りける日」が「雪の朝」になり、「皇后は美しき御庭の雪景色をご覧じ

て」を新たに加筆し、副詞句「直に立ちて」を「つと立ちて」に書き換えている。右の記事と図19は、その後の大正四年^{一九一五}四月二五日発行の教科書にも採用され継承された。

明治期の絵双六での受容

明治三四年^{一九〇二}発行「教訓名婦双六」の「上り」に、「清少納言 禁中に簾を上一詩を吟」と題し、庭前に雪を被る松と紅梅が綻ぶ中で撥簾する清少納言図がある。また同三六年^{一九〇三}刊「少女界」新年号付録に水野年方画の絵双六「日本十二名媛」や、同三九年^{一九〇六}刊『文藝俱樂部』新年号付録の梶田半古画「名媛繪端書双六」にも撥簾の図を載せ、絵双六での受容も見られた。十二月に購入した絵双六を正月に家族で楽しみながら、名媛について婦女童幼に教導する社会的風潮が明治後期に隆盛したことが知られよう。

昭和期の高等小学唱歌での受容

「香炉峯の雪」話は昭和一〇年^{一九三五}〜一六年^{一九四〇}の文部省検定済『新高等小学唱歌^{第二册}』にも図20の曲名「清少納言」で受容された。今の小学六年生用の新曲で、高等小学校が昭和一六年四月一日から国民学校高等科に変わる廃止直前の教材であった。曲はホ長調で、テンポ八四拍のほどよくゆっく

りした曲。作曲者は未公表だが、信時潔・長谷川良夫・下総皖一氏などが関わったようである。作詞者も不明だが、才媛の誉れが高い清少納言を七五調で讀えた歌詞は、次の如く実に秀逸である。

- 1 香爐峯の 雪はいかにとのたまはず しさきの宮のみ言葉に、御簾をかかげて、才學の高きほまれを のこしたり。
- 2 枕草子 をりにふれつつ 書きつけし、詩興の筆の新しく、いろもにほひも ならびなき、高きほまれを 傳へたり。
- 3 歌に名ある 元輔の子と 生まれ来て、歌こそ詠まね、俊才の中 にまじりて、いやさらに 高きほまれは 輝きぬ。



図20 (部分)

昭和期の雑誌付録・新聞での受容

昭和六年^{一九三一}刊『文藝俱樂部』新年号付録「名婦歌画帖」にも清少納言の撥簾看図と、明星派三才媛と言われた茅野雅子氏の短歌「ただひとり空をあゆめる日のごとし枕の草紙のこせる清女」、及び東京高等範学校佐藤保太郎氏の解説文が

ある。文学博士中村孝也氏が人選した和洋の女性五〇名収載のこの画帖は、婦女童幼に名婦についての教養や清少納言への知識をも磨き高めたであろう。

また同一二年（一九三三）刊『少女俱樂部』新年号付録「世界名婦かるた」にも「抜け出でて才名高し香爐峯 清少納言」の読札と、絵札に撥簾図を描き受容された。読札の裏面には、

清少納言（平安）は、清原元輔の女で、宮中にお仕へして、清少納言と呼ばれたのである。（大御代十）一條天皇の御代に、皇后にお仕へ申し、紫式部と共に才學をもつて現れてゐた。ある雪の降つた朝、皇后はおつきの者を顧みて、「香爐峯の雪は何如に。」と仰せられると、清少納言はつと立つて御簾をまき上げた。これは白樂天の詩に、「香爐峯の雪は簾をかかげて見る」とある句によつたもので、居合はず人々は皆、その敏捷さに感心した。

（後略）

と『枕草子』に準拠した解説文がある。正月にかかるたで遊び名婦や清少納言について教養を深める有益な教具になったと思われる。

翌一三年の『大毎小學生新聞』の「日本女子かゞみ 二十四名婦選（その一）」に、明治二八年（一九九五）の上村松園画「清少納言」に構図が類似した山口草平画の図21と、岸哲夫氏執筆の『枕草子』

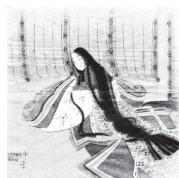


図21

に準拠した次の記事がある。

紫式部の女らしさ、しとやかさに比べて、清少納言は勝気で才走つた婦人であつた。或雪の降積つた日、一條天皇の皇后が御前の侍女達に向かつて、「香爐峯の雪はいかに。」と仰せられた時、少納言は直ちに座を立つて御前の御簾を巻上げた。有名な支那の白樂天の詩に「香爐峯の雪は簾を撥げて見る」とあるのを、當時の宮人は誰もこれくらゐな詩は暗唱してゐたが、とつさの場合で思ひつかなかつたのに、早くも少納言は皇后のお心をお察し申し上げたのであつた。（後略）

まとめ

『枕草子』「香爐峯の雪」章段をいち早く撰取した鎌倉時代の『十訓抄』は、幼少年の啓蒙書・教訓書として編成され、清少納言を一条帝の女房に位置づけ、帝の問いに撥簾して歡感を蒙る説話に変節して受容した。

江戸時代初期に絵入り整版本が興隆し大量印刷、広汎な読者獲得の新時代を迎えると、婦女子の徳を訓育する絵入りの『女郎花物語』に「香爐峯の雪」話が撰取された。続いて『本朝女鑑』「和哥哥妙談」『十訓抄』『四季川女文章入女文寶知恵鑑』『繪入女用文章千代壽』『婦寶文庫』『女用文章往かひ振』『理齊隨筆』などにも絵入りで受容された。それ

らの記事は源泉の『枕草子』ではなく、『十訓抄』を翻案した儒教的な女訓書として、江戸期の婦女子に豊かな教養が欠かれないことの教導に寄与した。また江戸初期に土佐光起が彩色の清少納言撥簾の図を制作して以降、昭和時代に至るまでやまと絵のモチーフの一つとして受容され広がりをみた。江戸中期になって多色摺木版面の技術が飛躍的に向上すると、錦絵にも清少納言撥簾の図が受容された。『枕草子』『香炉峯の雪』話のない雪持ちの松や綻ぶ庭梅などを図様に添えて意匠したり、賛を認めた錦絵に清少納言を史実に整合させて皇后定子女房とした三代歌川豊国画「古今名婦傳」や、史実に因われず上東門院彰子主催の宴で清少納言の撥簾の才知を彰子が賞賛したと説く「禁中雪後和歌之圖」など、受容の仕方でも多様であった。

明治時代中期には歴史絵を収めた『歴史繪志らべ』『大日本史略圖繪』などにも受容された。その絵画に添えた説明文は、『十訓抄』を基調にした江戸期までの受容から原典『枕草子』『香炉峯の雪』章段に準拠した内容に転換した。また後期の三三年に高等小学校教科書『等語國語讀本女子用下篇卷一』に「香炉峯の雪」話が採られると、翌年に清少納言撥簾看図を載せた「教訓名婦双六」が発行され、三六年に「日本十二名媛」、三九年に「名媛繪端書双六」が相次いで雑誌新年号の付録になり、女子児童に双六の遊戯を通して清少納言を「名婦」「名媛」として認知させ、童幼の教化を図った時代的

潮流が見られた。

昭和の時代に至っても前期には雑誌新年号付録に「名婦歌画帖」（六年）や「世界名婦かるた」（一二年）があり、それを介して「名婦」清少納言のありようを少女たちに教化する風潮が継承された。この間、一〇年から使用された教科書『訂新高等小學唱歌女子用』に、清少納言の功績を讃える新曲「清少納言」が教材になり、今日の六年生女子に音楽を通して名婦清少納言への関心を高める教育を文部省が推進したことも注視しておきたい。

以上、『枕草子』『香炉峯の雪』章段の受容について昭和時代前期まで通見してみた。なお、今回の特別講義では清少納言の撥簾看図に描画された松の画意についても私見を提示したが、本稿でそれを論じるには紙幅が尽きたので別稿を用意したい。

注

- (1) 拙稿「枕草子『香炉峯の雪』章段の絵画の軌跡と変容」（久下裕利編『物語絵・歌仙絵を考える——変容の軌跡』武蔵野書院、平成23年所収）。
- (2) 拙稿「枕草子」に取材した絵画について」（『日本文学研究』第五十九号、大東文化大学日本文学会、令和2年所収）。
- (3) 「枕草子春曙抄下」（北村季吟古注釈集成4、新典社、昭和52年）により、私に、漢字、「」を補い、原態の表記をへ〜内に示した。句点も底本による。

(4) 岡村繁氏『白氏文集三』新釈漢文大系、明治書院、平成30年。

(5) 金子元臣氏『枕草子評釈下巻』明治書院、大正13年。塩田良平氏『枕草子評釈』学生社、昭和30年。阿部秋生氏『枕草子評釈』東京堂、昭和33年。松田武夫氏『評釈枕草子』明治書院、昭和42年。石田穰二氏『枕草子』鑑賞日本古典文学、角川書店、昭和50年。阿部秋生・野村精一氏『古典評釈枕草子』右文書院、昭和55年。鈴木日出男氏『枕草子下』ほるぷ出版、昭和62年など。

(6) 『十訓抄一』(内題「晝添／十訓抄／撰陽 書堂磯野氏藏版」、卷末刊記「享保六辛丑歳首夏吉辰／撰陽 書堂磯野氏藏版」)。

(7) 前掲注(1)参照。

(8) 『女郎花物語』上中下三冊(萬治四年^辛初春吉日／中野小左衛門板行)。また同書には「和哥女郎花物語」の異称整版本があり、万治四年板と形態を同じくする三冊本と、その三冊を更に各二分した六冊本が伝存する。いずれも万治四年板の刊記を削り、新たに板元を「書林大阪／秋田屋安兵衛／坂田屋平兵衛求版」と入木した刊年不詳の後印本である。

(9) 『本朝女鑑九』(寛文元年辛丑九月吉日／寺町誓願寺前町／西村又左衛門板刊)。「ハ」「バ」「ミ」、清濁表記、句点などは底本による。

(10) 『東洋女訓叢書』第一編(東洋社、明治33年)所収『本朝女鑑』(巻九弁通上、清少納言九)による。

(11) 『和古今伊勢物語』二冊(元禄十二年^巳九月月上旬／浪華書肆

順慶町心齋橋筋／柏原清右衛門／同所 鳥飼市兵衛／同所 隅谷源右衛門)、及び『^{古和今和傳集}伊勢物語全』(無刊記)に所収。

(12) 『繪本故事談八』(正徳四龍集甲午林鐘敷旦／書肆 江戸日本橋南壹町目／須原屋茂兵衛／大阪心齋橋安堂寺町／大野木市兵衛)。

(13) 徳田武氏『中国小説と近世小説』(岩波講座日本文学史 19世紀の文学)第十卷、平成8年所収)。

(14) 詳細は前掲注(1)参照。

(15) 『^{四今川集}女用文章知恵鑑全』(寛政三年亥九月吉日／東都画工 北尾政美選／東都書林 江戸日本橋南三町目／前川六左衛門梓)。

(16) 『^{婦人入}女用文章千代壽』(寛政五年^辛七月吉日／御江戸本町筋 北^下八丁目／通油町南側／葛屋重三郎板)。

(17) 『婦寶文庫』(文政元年戊寅年季秋新刺／江戸書林 日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／下谷池之端仲町 同伊八版)。

『女用文章往かひ振』(天保四巳年春發行／江戸書林 日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／淺草茅町二丁目 同伊八)。

(18) 『理齋隨筆六』(編輯理齋志賀忍、校閱徳齋原義、画工柳川 谷城重信、筆耕今夕庵 副刷朝倉佐兵衛、天保丙申冬官許、同丁酉冬刻成、同戊戌春撥行)、「三都書林 京都寺町 松原下^ル処 勝村次右衛門／大坂心齋橋筋安堂寺町 秋田屋 太右衛門／大坂心齋橋筋博勞町 河内屋茂兵衛／尾州名古屋本町二丁目 永樂屋東四郎／江戸日本橋南一丁目 須原 屋茂兵衛／同二丁目 山城屋佐兵衛／同所 小林新兵衛／ 中橋廣小路 西宮彌兵衛／芝神明前 岡田屋嘉七／石町十

- 軒店 英大助／淺草茅町一丁目 須原屋伊八／横山町三丁目 和泉屋金石衛門／淺草新寺町 和泉屋庄三郎。
- (19) 『繪文匣』(松本春會) (一)撰者松井立詠、武陽田所町 松井庄左衛門開板、享保七^寅 天臘月吉日、彫工吉田宇衛門)。図版は注(1) 拙稿所載4図を参照されたい。
- (20) 「古今名婦傳」(一) 籙榮版／(註) 豊國筆)。豊國は天明六年^{一七八六} 生まれで、落款「七十八翁」から文久三年^{一八六三}の執筆。元治元年^{一八六五}の死去二年前の作になる。
- (21) 図版は注(1) 拙稿所載図9を参照されたい。
- (22) 「日本橋區大傳馬丁二丁目十四ハンチ／出版人三宅半四郎／本郷區湯島天神丁三丁目十一ハンチ／画工橋本直義／御届明治十九年三月日」とある。
- (23) 南柯亭夢覚について、星原大輔氏「寄贈資料『大倉孫兵衛旧蔵資料』からみる大倉書店の歩み」(『大倉山論集』第六十七輯、大倉精神文化研究所、令和3年3月)には、「南柯亭夢覚(高橋柯亭)」とあるのによる。
- (24) 『大日本史略圖繪』(御届明治十八年十二月八日 和田彫勇／編輯画工兼出版人日本橋區通一丁目十九番地 大倉孫兵衛)／「安達吟光畫」並びに『大日本史略圖繪 四』(印刷兼発行者 東京市日本橋區兩國吉川町貳番地 大黒屋松木平吉) 明治31年3月5日発行。
- (25) 『歴史繪志らべ』乙七号 (一)發賣 東京市日本橋區本石町貳丁目九番地 文栄堂、(一)印刷並發行者 東京市日本橋區本石町貳丁目九番地 大貫政教) 明治22年11月刊。
- (26) 図様は注(1) 拙稿所載図21を参照されたい。
- (27) 『國語讀本』^{女子用} 下篇卷一『金港堂書籍株式会社、明治33年12月28日発行。
- (28) 『尋常小學讀本卷十』日本書籍株式会社、明治43年6月28日発行。
- (29) 発行人「東京市日本橋區馬喰町貳丁目七番地樋口銀太郎」明治34年11月発行。
- (30) 「少女界」2巻1号付録 明治36年1月発行。図様は注(1) 拙稿所載図22を参照されたい。
- (31) 『文藝俱樂部』12巻第1号附録、博文館、明治39年1月1日発行。図様は注(1) 拙稿所載図23を参照されたい。
- (32) 『高等小學唱歌』^{女子用} 大日本圖書株式会社、昭和10年3月31日発行。句読点は原文による。
- (33) 『文藝俱樂部』九巻第1号附録、博文館、昭和6年1月1日発行。
- (34) 『少女俱樂部』第15巻第1号附録、大日本雄弁會講談社、昭和12年1月1日発行。図様は注(1) 拙稿所載図24を参照されたい。
- (35) 大坂毎日新聞社、昭和13年7月3日(日曜日) 発行。
- (36) 『華陽閣精賞』(大正9年12月) 収載の上村松園画「清少納言」、それを模写した大熊秀齋画「清少納言之図」(架蔵、図12参照)に類似。